

人文学に《信念》は必要か？——フィクション論からの視点

河田 学（京都精華大学非常勤講師）

本報告のお誘いを守岡さんから頂いた十日ほど後、守岡さんからメールが届いた。

>> それから、題名が決まりましたらお知らせください。

>> また、概要も 2/9 頃までに頂けたら幸いです。

これはとても自然なことのようには思えるが、じつのところ守岡さんの行為の正当性は、さまざまな信念に支えられている。例えば、「河田は自分が知っているメールアドレスを今も使っているはずだ」というのも、そのような信念の一つである。幸いこのメールは私の手元に届き、私はこうして今自分の報告の概要を書いているわけだが、私がほんとうにメールアドレスを変更していたら、あるいは守岡さんが知らないところでメールの送受信のできない海外に行っていたらどうだろうか。私からいっこうに返信の届かない守岡さんは、痺れを切らして共通の知人である石田さんに相談する。私が一ヶ月のイラク出張に出かけることをずいぶんと前から知っていた石田さんは、守岡さんの相談に「え？」、と首を傾げるが、ここでもやはり、守岡さんが「河田は日本にいるはずだ」という信念を持っていたということになれば、石田さんの違和感も解消されてしまう。このように、現実上は合目的でない行為さえも合理的に理解することを可能にしてくれる《信念》という概念は、人間をめぐるさまざまな事象を説明するうえでは、非常に強力な概念である。しかしその一方で、信念にかんする文脈、さらに広くいえば、志向的な文脈は、指示的に不透明であり、その扱いは哲学者たちを悩ませてきたのもまた事実である。

一方フィクション論の分野においては、私たちフィクションの受容者は、その意味内容がほんとうではないことを知りつつ、フィクションを受容するのだ（そしてそれこそが、フィクションをたんなる「嘘」とを分かつ公準である）ということが、いわば定説となっている。しかしそこで問題になるのは、そうであればなぜ私たちは「ほんとうではない」とわかっているフィクションにたいして感情移入をすることが可能なのかということである。これは、ラドフォードらが1975年の論文、「われわれはいかにしてアンナ・カレーニナの運命に感動することができるのか」を発表して以来、フィクションをめぐる論争の一つの中心となっている。ここでもやはり、フィクションの意味内容にたいして、われわれが《信念》を形成するのか否かが問題となっているのである。本報告では、《信念》をあくまでも説明上のガジェットと考えたうえで、その存在意義、あるいは逆に、《信念》なしでやっていく方向性を模索する。その議論の中で、フィクションをめぐる理論的研究と情報学との意外な接点を指摘することができたらと考えている。

《主要参考文献》

Radford, Colin and Michael Weston. 1975. "How Can We be Moved By the Fate of Anna Karenina?" *Proceedings of the Aristotelian Society*, supp. voll. 49, pp. 67-80.

Walton, Kendall. 1978. "Fearing Fictions." *Journal of Philosophy*, 75, pp. 5-27.

Yanal, Robert J. 1999. *Paradoxes of Emotion and Fiction*. Pennsylvania University Press.